

**【精神性を示す遺物】**

縄文文化の精神性を表す代表的な遺物に「土偶」があります。初期は乳房だけ付けた女性像として作られ、中頃には妊婦の姿を現したものに変わることから、命の誕生や再生の願いを表したと考えられています。しかし、後半になると髭や扁平な胸など男性的な要素も加わり両性的な造形になります。また、多くの土偶が意図的に壊されて出土します。このことは“死”をイメージする破壊が、再生(生)の始まりとする縄文の思考を示しているのかもしれませんが。

6,500年ほど前の墓から幼児の足形を押しつけた粘土板が出土することがあります。これらは北海道特有の遺物で、幼くして亡くなった子どもの足形を押しつけたものと考えられています。また約5,000年前以降、石刀や石棒と呼ばれる遺物も出土しています。これらは子孫繁栄の象徴として男根を模して作られたと考えられています。こうした祭祀や儀礼を示す遺物を見ると、命を尊び畏敬する縄文人の思いが感じられます。



上:土偶 西島松5遺跡(恵庭市)  
下:板状土偶 フコッペ貝塚(余市町)



足形付土板と副葬された石器 豊原4遺跡(函館市)重要文化財



周堤墓から出土した石棒と土器  
朱円周堤墓群(斜里町)道指定有形文化財

**【縄文以降の北海道】**

気候変動や大規模な災害などの環境変化にも巧みに適応し、1万年以上も存続してきた縄文文化でしたが、約2,500年前に突然その終焉を迎えます。要因は、朝鮮半島や中国長江下流域から九州北部に水稲耕作が伝わり、これを中核的な生業として鉄器や各種穀物の栽培を伴う弥生文化が急速に日本列島の大部分に広がったことにあります。

これ以降、縄文時代から数千年に渡って維持されてきた北海道南西部と東北地方北部の地域文化圏は解消し、北海道側のみ「続縄文文化」として知られる、縄文文化の伝統を強く残した狩猟採集民の文化が栄えました。また、本州の古墳時代の中頃にあたる5~7世紀には、サハリンから海獣猟や漁労に特化した「オホーツク文化」が北海道北東海岸を中心に広がり、道南の奥尻島まで進出するようになります。さらに、本州以南に中央集権的な政府が成立した7世紀頃になると、アワ・ヒエなどの雑穀農耕を取り入れた「擦文文化」が成立し、その後「アイヌ文化」が出現することになります。道内の北東部を中心にこうした縄文文化以降の竪穴式住居群が窪みのまま残っている遺跡が多く知られており、北海道特有の歴史を今に伝える重要な文化遺産として保存されています。

このように、北海道には日本のメイン・ストリームとは別の、もう一つの歴史が流れているのです。



窪地に残る竪穴住居群 シブツノナイ竪穴住居跡(湧別町)



オホーツク文化の遺物 松法川北岸遺跡(羅臼町)  
重要文化財 撮影:佐藤雅彦



樹皮衣\*アイヌ語でアットウシ  
(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構蔵)